

古式祭礼に見るコミュニティとそこに展開するコミュニケーション

〔大津市今堅田一丁目の愛宕講と地蔵講を中心〕

加藤 賢治

はじめに

現代の地域コミュニティを眺めるとき、村の鎮守の氏神（産土神）を中心とした旧村落地域と、特定の氏神を持たない新興住宅地域に大きく二つに分けることができる。

近世の村落社会は、生老病死全てがそのコミュニティの中で完結していたが、現代の地域コミュニティは、公共の福祉や教育、サービスが充実し、便利になった一方で、地域の繋がりが希薄になった。よって近年発生した自然災害において、その希薄なコミュニティが機能せず、被害を大きくしてしまうことも明らかとなった。

滋賀県は古来、貴族や寺社の荘園が多く存在し、その名残として今もなお宮座の形態をとる産土神を中心とした集落が多く残っている。しかしながら第二次大戦後の急速な経済成長の中で宮座の形態は消滅、あるいは大きく変化してきた。筆者は大津市仰木地区と今堅田地区について調査を行い、宮座の古式祭礼の現状を『村座と祭礼』―滋賀県大津市仰木地区の例―（二〇一〇年近江地方史研究第四四号）、『宮座の祭礼』―今堅田に伝わる祭礼「野神祭り」に見られる現状―（二〇一二年成

Title :

Community as Detected in Ancient Festivals and the Resulting Expansion of Communication, Focusing on the Atago-ko and Jizo-ko Festivals of Imakatata 1-Chome, Otsu City.

Summary :

I examined two ancient festivals, Atago-ko and Jizo-ko, which are carried today, in Imakatata 1-chome and considered their role in the communication of the district.

安造形大学附属近江学研究所紀要第一号)において現状を報告した。同様の調査は、高橋統一「滋賀県の宮座の現況」(一九六九年 東洋大学アジア・アフリカ文化研究所研究年表)、小栗栖健治『宮座祭祀の史的 연구』(二〇〇五年 岩田書院)などいくつかの滋賀県の集落を舞台とした論文や報告書が発表されている。それらは、その古式祭祀についての中世から近世、あるいは近世から現代にいたる形式の変化やそれらの特異性についての言及が中心であるが、今回の報告では、古式祭祀におけるコミュニケーションとそこに繰り広げられるコミュニケーションに注目したいと考えている。

現在、琵琶湖の西側にある湖西地域や南の湖南地域は、京阪神に近く、そのベッドタウンとして発展し、大型マンションの建設や新興住宅地の積極的な開発が行なわれ、新旧の居住地域が隣接している。旧村落地域では、新興住宅地に見られる新しいコミュニケーションにも関与しながら、古式祭祀を継承する難しさに直面し、新興住宅地においては、古式祭祀の文化的価値に注目し、そのかけがえのない行事に思いを寄せながら、現代の希薄な地域コミュニケーションに嘆いている。

氏神(産土神)を中心とした氏子集団の結束はある程度強く、例えば、どこかの誰が何をしているか、また、その子供がどのような性格で、どんな問題を抱えているのかということも共有しつつ、自然なかたちでその地域独自の善悪の道徳も根付いているように見える。

一方で新興住宅地においても、地域の運動会や市民センターのサークル活動など、種々のコミュニケーションが存在し、それらの活動を通じて情報が交換され、固い絆となっている事例も散見される。しかし、地域コミュニケーションの核となる町内の自治会への加入は強制的でない地域も多くあり、その集団の弱さが読み取れる。

歴史や伝承に支えられた祭祀は、その地域の誇りであり、明快なアイデンティティーである。その意味において、神のもとに平等な村衆が存在し、連綿と続いてきた古式祭祀に敬意を表すコミュニケーションの存在は、今後の社会のあり方について大変重要な指針を示していると考えられないであろうか。

筆者が『宮座の祭祀』(今堅田に伝わる祭祀「野神祭り」に見られる現状)(二〇一二年成安造形大学附属近江学研究所紀要第一号)で報告した大津市今堅田地区は、現在の行政区画で今堅田一丁目、二丁目、三丁目の三つの地域に分かれている。伊豆神田神社は基本的に今堅田地区全体の氏神であるが、氏子として神社の祭祀に関わる人々は、一丁目に住居があるものに限られている。二丁目と三丁目は、新興の住宅街となっており、その住民は氏神として神社を意識しているものの、神社の祭祀に参加することはない。

一丁目においては、西町・仲町・嶋町・南町の四つの地域に分かれ、それぞれの町から氏子総代が出され、講などが盛んに行なわれている。伊豆神田神社の分社である野神神社では中世

から継承されていると伝わる野神講が行なわれていたが、現在は伊豆神田神社の氏子（いわゆる今堅田一丁目住民）がこれを引き継いでいる。これらの伝統行事をまちづくり活かさうとする「今堅田まちづくり委員会」による活動が平成十八年から始まっている。

今回は、平成二五年（二〇一三）八月二四日、今堅田一丁目の地蔵講が行う地蔵盆「地蔵巡り」に参加し、講というコミュニティとそこに展開するコミュニケーションに注目してみたい。

第一章 今堅田の愛宕講と地蔵講

一 一 今堅田の講

大津市今堅田一丁目にある伊豆神田神社を産土神とする氏子は、そのほとんどが琵琶湖に面した南北に細長い今堅田一丁目（約二〇世帯）に居住し、北から西町（ニシジョウ）四五世帯・仲町（ナカジョウ）十五世帯・嶋町（シマジョウ）一八世帯・南町（ミナミジョウ）四一世帯の四つの地域に分かれている。この地域は近世に、出来島（デケジマ）と呼ばれ、船大工と農業を生業とする村衆が集住した。現在でも、兼業農家と造船業を営む企業がこの地域にみられる。

この地域には、今もなお「地蔵講」と「愛宕講」そして「日待ち」と呼ばれる「講」が行われている。かつては他地域でもみられる伊勢講や行者講などが存在したが現在では無くなって

いる。

これらの講は、当屋にあたる家を中心となって運営される。四つの各地域では二軒ずつ当屋を順番に担当し、地蔵・愛宕の二つの講の当屋となって運営する。最も大きな西町は、先の当屋二軒と今年の当屋二軒、次年の当屋二軒の六軒が講の行事の中心をになう。要するに順番で連続三年間、講の行事に携わることになる。仲町、嶋町、南町は同じく二軒が当屋となり、五〇六軒の家が当屋を補佐し、毎年地蔵盆が終わると当屋と補佐役すべてが入れ替わる。

それとは別に、西町三名、仲町一名、嶋町一名、南町三名の八名〔註2〕が宮総代としてそれぞれの町から選出され、この地域の氏神である伊豆神田神社の例祭を中心に宮座の運営（宮仕事）に関っている。宮総代の任期は三年と決まっている。

愛宕講は本当屋が代表して京都の愛宕山に登り、愛宕権現にお参りをして火伏せの札を持ち帰ることが主な内容となる。かつては一月三日に愛宕山に登り、戻り次第、講中の各家に配布して回ったというが、近年は、雪が積もらない十一月、十二月頃に山に入り、年内中に札を各家に配る習慣になっっている。

一月の最終土曜日と日曜日のいずれかの日に各町で年に一回の「日待ち」と呼ばれる講が行われる。かつては一月三十一日と決まっておおり、それぞれの当屋の家で行われていたが、集まる人数が多い町もあるので、二日に分けて今堅田公民館（大津市今堅田一丁目 ※P123地図）で行われるようになった〔註3〕。

平成二六年(二〇一四)の日待ち講は、今堅田公民館にて、一月二五日(土)に西町(公民館二階)と仲町(当屋宅)、二六日(日)に南町(公民館二階)と嶋町(当屋宅)とに別れていずれも午後七時から行われた。各町内の家から男女問わず必ず成人一名が参加することになっている。

講の内容は、午後七時から約二〇分程度、僧侶による読経が行われ、その後、講の会計報告や行事の日程、役員選抜などの決めごとを行う。決めごとの中には、愛宕講や地蔵講として行われる地蔵盆という行事の内容や、当屋の決定、伊豆神田神社の宮総代の選出なども含まれるため、各町内の神仏等の信仰的なコミュニティの決めごととはすべてこの日に決着することになる^{〔註4〕}。

読経は、今堅田一丁目にある圓成寺と海蔵寺の僧侶が務める。いずれも曹洞宗の寺院で、公民館の会場では、床の間に掲げられた「天照大皇神」の掛軸と「愛宕大神」のお札の前で、般若心経を唱え、町内の一年間の無病息災、厄難排除などが祈願される。神と仏が一体となった感がある行事である。

第二章 地蔵巡り

地蔵講は八月の地蔵縁日(二三日)いわゆる地蔵盆の運営を行う。四つの地域によりそれぞれ異なるが、基本的な形式では各町で管理する石造地蔵菩薩像(以下地蔵尊)を当屋前にきれ

いに飾り付け、地蔵盆当日に行われる「地蔵巡り」に備えるのである。

平成二五年の地蔵盆は、八月二三日(土)に行われた。前日の二二日に準備が行われる。各町の当屋は、仮設の地蔵堂を建て、町が管理する地蔵尊をそこに安置し、飾り付けを行う。地蔵尊への供え物は、米粉でつくった紅白の餅が中心で、琵琶湖のヨシを斜めに切った切り口を使って、餅に菊の花などの模様を押し付け装飾されている。以前は、この餅ばかりであったというが、近年はジュースやビールなどの酒類、市販されている菓子が地蔵尊の前に所せましと並ぶ。町内の各家からこの日に供え物を持ち込まれるのである。

今堅田の地蔵盆の特徴は、これらの町が管理する地蔵尊以外に個人が所有する地蔵尊を各家庭で飾り付けることと、その各家の地蔵尊を拝みながら巡る「地蔵巡り」である。

準備が整った二三日(土)の地蔵盆当日、午後七時から「地蔵巡り」に参加した(写真1)。

午後七時には太陽が西の山に沈み、各家の軒下に吊るされた「南無地蔵大菩薩」、「南無地蔵尊」と書かれた赤や白地の大きな提灯に火が灯された(写真2)。今堅田(旧出来島)の最も南から今回案内いただいた南町の桑野氏と西町の仲川氏とともに地蔵を訪ねた。

各家の地蔵尊は、広い玄関に華やかに飾り付けられたものや(写真3)、家の前に臨時の祠を建てて祀ってあるもの、もと

もと、家の前や裏庭に安置されている祠の扉を開け、中に祀られている地蔵尊を拝むものなど様々である(写真4)。地蔵尊には、家を改築するために地面を整地する時や、田畑を耕す際に出てきたといわれているもの(写真5)、夢見枕に出てきた地蔵尊を湖中から引き上げ、母親の病が治ったという伝承を持つものなどそれぞれに出自がある(写真6)。また、数えきれないほどの地蔵尊を所有する家では、そのすべてを居間に並べてお参りができるようにされている(写真7・8・9)。

地蔵尊の形も様々で、身体と頭、顔の区別がつくものには、美しく化粧がされている。一方、何かが彫刻されているが、それがどの部分かわからないものや、半分に折れてしまっているもの、五輪塔の最上部と判断できるものなど、地蔵尊として判別しにくいものがあるが、それらがすべて地蔵尊として尊ばれている。

南町が管理する地蔵尊は、唐破風がついた格式ある古い仮設の地蔵堂に安置されている(写真8・12)。その前には、イベント用のテントが二張り立てられており、酒類やジュース、おつまみ、うどんやたこ焼きなどの軽食がふるまわれ、子どもや大人たちも一緒にあって地域の人々が楽しそうに語らっていた(写真13)。案内いただいた桑野氏は「われわれが子どもの頃は、この地蔵堂に蚊帳をかけてもらい、地蔵盆の前日、町内の子どもたちと一夜を過ごし一晩中遊んだ思い出がある」と古き良き時代の子どもの楽しさを教えていただいた。



写真3：南町の個人所有の地蔵尊 家主がご詠歌を詠っていた珍しい北向き地蔵尊であると説明を受けた



写真1：日没真近の今堅田南町



写真4：南町の個人所有の地蔵尊 広い玄関いっぱいには飾り付けが行われていて、中央が地蔵尊で、向かって右に五輪塔の最上部と思われる石がある



写真2：各家の軒下に吊るされる提灯



写真9：駐車場が地藏堂に 個人所有の地藏尊 手前のラジオカセットからご詠歌が流れていた



写真5：元は海蔵寺の境内にあったものを辻に出して 拝むことができるようになった石仏群



写真10：南町管理の地藏尊



写真6：湖中から引き出し母親の病気が治ったという伝承を伝える半身地藏尊 子どもの「くさ」に効くといことから「くさ地藏」とも呼ばれる



写真11：立派な唐破風が特徴



写真7：多くの石仏を所有する個人宅 お供えも多い



写真12：南町お堂内部



写真8：中央に米粉でつくった餅が供えてある

南町の北、嶋町との境、浄土真宗泉福寺の前に少し大きめの祠があった。その祠の中は空であったが、平生は先ほど拝んだ南町が管理する地藏尊と、嶋町が管理する地藏尊の二体の地藏尊が安置されているという。そして、その祠に向かって右側に石塔が立っており、その石塔の上の部分に札を収納する場所があり、その中に南町の当屋が京都の愛宕権現に参って持ち帰った火伏せの札が入っているという。この火伏せの札は、南町を火の難から守っているのである(写真15)。嶋町の火伏せの札は、そこから少し今堅田の旧道を北に進み、右に折れ、琵琶湖へ向かった「出島灯台」の下に同じような石塔に入っている(写真16)。地藏盆の提灯の火が静かに灯る「出島灯台」への両側の古い家並みは、遠くに聞こえるご詠歌の声や鐘の音、そして琵琶湖のさざなみと重なって、情緒ある雰囲気が漂っていた(写真14)。

再び、旧道に戻り少し北へ進むと嶋町の地藏尊を祀るお堂にたくさんの方が集まっていた(写真17・18)。そこからすぐに仲町に入った。入ってすぐの左手に、祠とその横に二本の石塔があった。祠は中町の地藏尊を安置するもので、向かって左の石塔は、今までのものと同じく愛宕神社の火伏せの札が入ったもので、右側の石塔には、秋葉神社の火伏せの札が入っているという。関西圏の愛宕山に対して、秋葉山は、中部地方から東方面の火伏せの神で知られている。仲町では、明治期に大きな火災があり、それ以降、秋葉山の神様も祀るようになったとい



写真15



写真13: 南町管理の地藏尊の前に張られたテント様々なコミュニケーションが見られた



写真16



写真14: 出島灯台に続く道

う（写真19）。

仲町の仮設のお堂にもお参りしながら（写真20・21）、最後となる西町の地藏尊に向かった。西町の地藏堂は、伊豆神田神社の前、圓成寺の向かいに設置しており、きれいなお堂の中にたくさんのお供え物に囲まれた地藏尊が安置されていた（写真22～24）。

地藏巡りはこのように、午後七時から八時半まで、それぞれの地藏尊の前でご詠歌が流れる中、各町内の老若男女が自分の町内と他の町内にある町管理の地藏尊と個人所有の地藏尊を含め、それぞれ二〇ヶ所以上を巡る。地藏尊の前では、ふるまわれた軽食や飲み物をいただきながら、「ご無沙汰です。お父さんお元気？」「お孫さん生まれはったんや」「お嬢さん大きならはって」など、年に一回の非常に充実した貴重なコミュニケーションが図られるのである。

九時になると子どもたちは家に帰り、大人たちは各町の地藏堂に集まる。そこへ、この年の担当者の長老がご詠歌を詠いに来てくれるのである。そのご詠歌を聞きながら、もう一度地藏尊に家内安全を祈願して、地藏盆は終焉を迎えるのである〔註5〕。



写真19



写真17：嶋町管理の地藏尊



写真20：仲町管理の地藏尊



写真18：嶋町にお参りする人々



写真23：西町管理の地蔵尊



写真21：仲町の地蔵堂内



写真24：西町管理の地蔵堂に集まる人々



写真22：新調された西町管理の地蔵堂

第三章 愛宕講と地蔵講の関係

今堅田一丁目（旧出来島）では、愛宕、地蔵の二つの講のつながりについてあまり注目されていないようであるが、地蔵が安置される祠の横に愛宕権現の札を納める石塔があることや、二つの講を同じ当屋が務めるという仕組みから、この二つの講は何らかの関係性と、その必要性があったかではないかと考えられる。ここではその関係性について考えてみたい。

地蔵信仰については、一般には京都の子どもの守護神として石仏の地蔵菩薩を各町内単位で祀るという「地蔵盆」がよく知られる。滋賀県においても広くその風習は残されており、京都、滋賀以外の地域でもみられる民間信仰である。

地蔵信仰の起源は、平安時代の末法思想をもとに産まれた浄土信仰や、輪廻転生の考え方などに遡る。六道輪廻転生（天・人間・修羅・餓鬼・畜生・地獄）の苦しみから逃れ、極楽浄土に生まれ変わるためには、造仏、造塔、写経などの作善を積む必要がある、平安時代ではそれを行うことができるのは財力のある都の貴族のみであった。中世から近世にかけては、庶民の中にも浄土信仰が広くいきわたることとなるが、農業や漁業などを生業として忙しく生きる庶民には、極楽浄土にいくための作善をおこなうことができないという大前提があった。したがって、一般庶民は、来世を極楽浄土に生まれ変われるという希望を捨て、やがては地獄へ落ちる定を自覚していたのである。

そのような中で、『今昔物語』や『沙石集』、『宇治拾遺物語』などの仏教説話の中に落ちるべくして地獄に墮ちた庶民を地蔵菩薩が救うという話が現れ、庶民の信仰が集まるようになった^{〔註6〕}。

特に、堅田の地は、船運や船大工、農業を中心としながらも、近世は漁業も盛んに行われており、特に殺生を生業とするものは来世の地獄を覚悟していた。よって他地域よりも地蔵信仰を厚く信仰していたことが想像できる。

また、堅田浮御堂の創建に関わると伝わる恵心僧都源信は元三大師良源の弟子として比叡山延暦寺横川で修行し、念仏や極楽浄土を代表とする日本浄土信仰の根本をつくった人物である。そのお膝元である堅田地域に地蔵信仰が根付いたことは何ら不思議なことではない。

ただ、今回はその今堅田地域の地蔵盆をはじめとする地蔵信仰を調査する中で、愛宕山の信仰との繋がりを見た。ここで、その地蔵信仰と愛宕山の関係に触れた興味深い資料があるので紹介したい。

一つは、『都名所図会』巻之四（秋里籬島著 安永九年（一七八〇））である。そこには「本殿は阿太子山（あたごさん）権現にして、祭る所は伊弉冉尊（いざなみのみこと）・火産靈尊（ほのむすびのみこと）なり。本地は將軍地蔵を垂迹となし、帝都の守護神として火災を永く退け給ふなり。」と紹介されている。愛宕権現は火伏せの神でありながら本地仏は將軍地蔵と

いう地蔵尊であるという。

また、もう一つは、『見た京物語』（木室卯雲著 天明元年（一七八一））で、京都の町の様子を書いているが「町々の木戸際ごとに石地蔵を安置す。是愛宕の本地にて火伏せなるべし」としている。二つの資料はほぼ同じ時代に書かれており、どちらも、火伏せの神と地蔵尊が一体化し、特に『見た京物語』においては、火伏せを祈願するために石仏である地蔵尊を町ぐるみで信仰していたように読み取れる^{〔註7〕}。

京の町や堅田の様に民家が密集している所は、特に火災に敏感であり、地獄からの救いの手である浄土信仰の意味合いよりも、火伏せへの祈りの方が強く信仰されていたかもしれない。

今堅田においては、各町内の地蔵尊と愛宕権現の火伏せの札が一对となり、特に仲町の地蔵尊の端に愛宕神社と秋葉神社の火伏せの札を入れた石塔があることなどは、地蔵信仰の新たな見方を示唆しているのではなからうか（写真15・16・19・25）。



写真25: 西町の愛宕神社石塔(火伏せの札を入れた石塔)

第四章 講に見る地域コミュニティ

このように今堅田一丁目では約一二〇世帯の住民が、多少かたちをかえながらも現代まで連続と講を続けてきた。この理由はいかなるものであろうか。古くから続いてきた風習を断ち切ることができなかったということもあるかもしれないが、全く必要のないものであれば消えていたかもしれない。確かに、恐ろしい火事という災難から逃れたいという祈り、そして、町内全体が、家族が健康で幸せに暮らせるという家内安全を祈願するという行為も大切であると考えられる。

しかし、今回のフィールド調査で感じたのは、小さな地域コミュニティにおいて実践されていた大切なコミュニケーションのあり方である。

大人も子ども、みんなが各町を巡り、それぞれ地蔵尊に手を合わせながら、「ご無沙汰ですね」「お元気ですか」という人と人との会話がそこにあった。かつて子どもたちはこの日だけ建てられる仮設の地蔵堂で一晩寝ずに遊ぶのを大変楽しみにしていたし、地蔵尊を介しての一年に一度の挨拶回りと、「日待ち」という講の開催によって町内住民は常にお互いの生活を知ることがのできるのである。

現代社会における地域においては、そのような地域の繋がりがなくとも生活ができるようにつくられている。よって新興住宅地においては、あえてこのようなコミュニティをつくる動き

はあまり出てこなかった。しかし、近年はその地域の繋がりが重要視されている。

今堅田一丁目では、各町から数名ずつが集まり、二〇〇九年から「今堅田まちづくり委員会」が発足され、地域の文化力を活かした地域活性化が行われている。地域内の地蔵尊を調査して地図を制作することや、大津市の指定を受けた出島灯台（デジマトウダイ）周辺の景観を守る運動などが具体的に行われている。

ここでは、地蔵巡りなどの古い風習を一つのアイデンティティとして位置づけ、それらを核に住民が活動しているのである。このような考え方によって、古くからの講が消えずに続けられているのである。

おわりに

現代の経済学の中ではGDP指数などの経済指標について様々な見方がなされており、数字のみでどこまで社会の幸福感が計れるのかという疑問が示されている。例えば、美しい自然環境や、風景など金額で価値が計れないものは、経済指数に現れないのである。経済至上主義の中では、モノやサービスが売買されることによって数字に変化が起り、その活動の多少によって豊かな社会とそうでない社会を判断している。これを交換型社会と仮定すると、家事労働やボランティア活動など経済

指数として現れない活動を重んじる社会を非交換型社会という。この非交換型社会のあり方を未来の社会に置き換えるような取り組みも大切であるといえる。

今堅田一丁目に見られる講を中心としたコミュニティのあり方の中に、理想の地域社会のあり方が見えてくると考えている。今回の調査で貴重な時間を割いて、聞きとりやフィールドワークにご協力いただいた本城善孝様、仲川利明様、桑野仁様にごこの紙面をお借りして厚く御礼申しあげます。

註

1. 三丁目は真野浜に面する古い集落に地藏盆という行事が残っており、真野浜に伝わる石造地藏を祀っている。
2. 各町内の世帯数に合わせて宮総代の人数が決まっている。
3. 講の日が三十一日となっていたのは、毎月一日の日を休みにしてきた職人たちの信仰を含んだ娯楽として行われていた「日待講」の名残ではないかと考えられる。この地域ではこの講を「日待ち」と呼んでいる。
4. 今堅田自治会の役員などは別になる。自治会の行事は完全に別れている。
5. 翌朝、子どもたちがお供え物を丁寧に小分けして、町内の各家に配りにまわるといふ。ここにも、一つのコミュニティ



ケーションが見える。

6. 閻魔庁に住む地獄の主閻魔王と団体であるという考え方もあり、地藏信仰をより強いものにした。

7. 田中久夫『地藏信仰と民俗』（岩田書院 一九九五年）

参考文献

- ・肥後和男『近江に於ける宮座の研究』（東京理科大学 一九三八年）
- ・高橋統一『滋賀県の宮座の現況』（東洋大学アジア・アフリカ文化研究所研究年表 一九六九年）
- ・小栗栖健治『宮座祭祀の史的研究』（岩田書院 二〇〇五年）
- ・橋本鉄男『琵琶湖の民俗誌』（文化出版局 一九八四年）
- ・加藤賢治「村座と祭礼―滋賀県大津市仰木地区の例―」（近江地方史研究第四四号 二〇一〇年）
- ・加藤賢治「宮座の祭礼―今堅田に伝わる祭礼 野神祭りに見られる現状―」（成安造形大学附属近江学研究所紀要1号 二〇一二年）
- ・田中久夫『地藏信仰と民俗』（岩田書院 一九九五年）
- ・新修大津市史 第七卷 北部地域

成安造形大学附属近江学研究所紀要 第3号

発行日 平成26年3月24日

発行 学校法人京都成安学園 成安造形大学 附属近江学研究所
〒520-0248 滋賀県大津市仰木の里東4-3-1
電話 077-574-2118

発行者 木村 至宏

編集 成安造形大学附属近江学研究所

印刷所 宮川印刷株式会社

©Seian University of Art and Design 2014

ISSN 2186-6937